



**転生前のチュートリアルで
異世界最強になりました。3
準備し過ぎて第二の人生は
イージーモードです！**

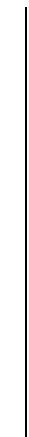
α L P H α L I G H T

小川悟
Ogawa Satoru



CONTENTS

後日談



281

番外編



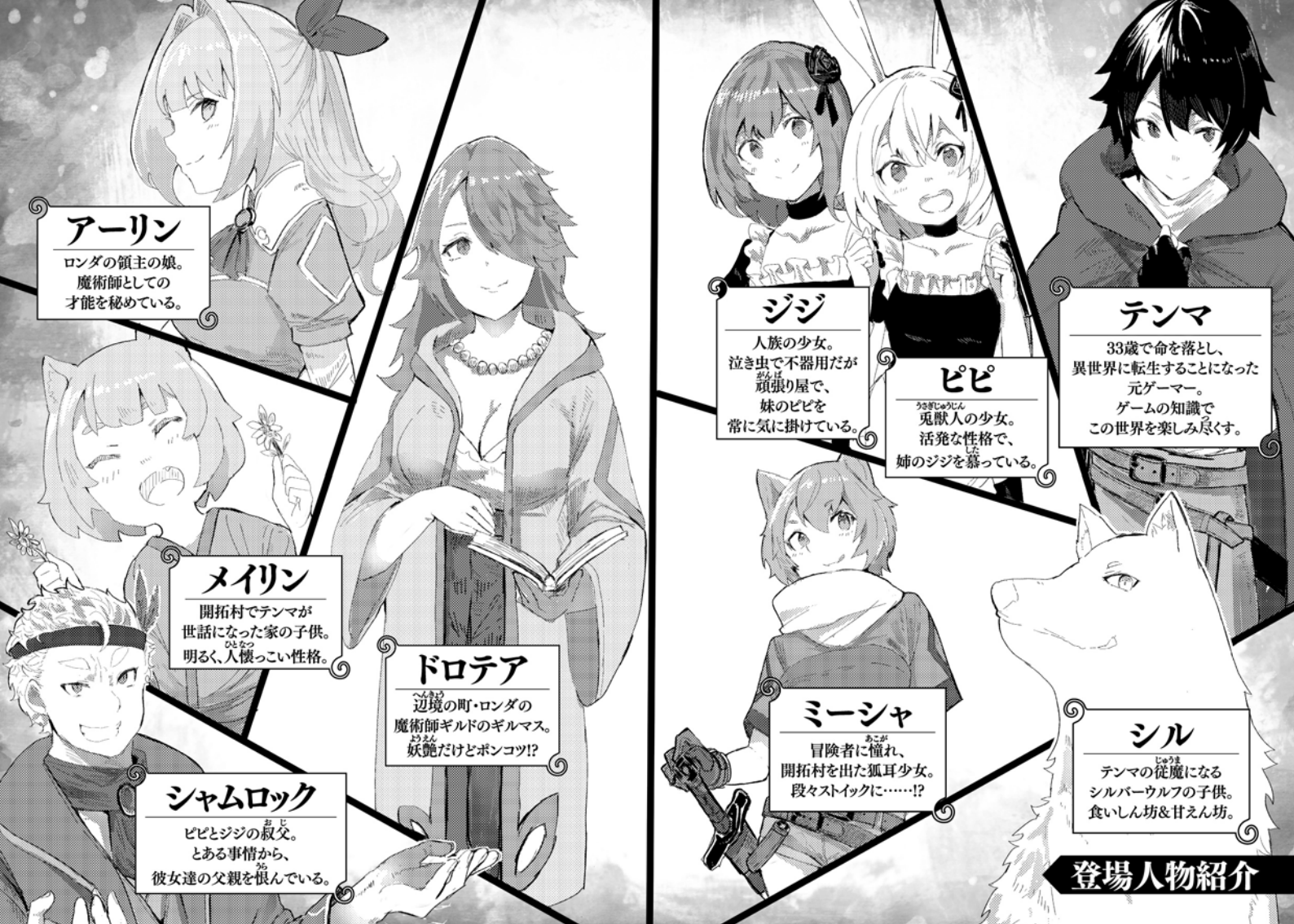
271

本編
ロンダ騷乱



007

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.



アーリン

ロンダの領主の娘。
魔術師としての
才能を秘めている。

メイリン

開拓村でテンマが
世話になった家の子供。
明るく、人懐っこい性格。

ドロテア

辺境の町・ロンダの
魔術師ギルドのギルマス。
妖艶だけどボンコツ!?

シャムロック

ピピとジジの叔父。
とある事情から、
彼女達の父親を恨んでいる。

ジジ

人族の少女。
泣き虫で不器用だが
頑張り屋で、
妹のピピを
常に気に掛けている。

ピピ

兔獣人の少女。
活発な性格で、
姉のジジを慕っている。

テンマ

33歳で命を落とし、
異世界に転生することになった
元ゲーマー。
ゲームの知識で
この世界を楽しみ尽くす。

ミーシャ

冒険者に憧れ、
開拓村を出た狐耳少女。
段々ストイックに……!?

シル

テンマの従魔になる
シルバーウルフの子供。
食いしん坊&甘えん坊。

登場人物紹介

本
編

ロンダ騒乱

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

第1話 研修成果

俺、テンマは今、空間ごと複製できる空間魔術——ディメンションエリアを用いて生成したどこでも研修施設——D研内の仮設住居にて、みんなの夕飯を作っている。

料理の最中ってつい考え事をしてしまうんだよな。

俺はこれまでの出来事を振り返る。

日本で三十三歳の時に命を落とした俺は、十四歳の少年の姿で異世界に転生させられることに。

転生先で簡単に死なないように三ヶ月の研修を受けることになったのだが、蓋を開けてみればそれが終わったのはなんと十五年後。

しかし、その中であらゆる工夫をしたおかげで、俺のステータスはなかなかチートなことになってしまった。

研修後、俺が放り出されたのは、テラスという名前の世界にある辺鄙な村・開拓村の近く。

右も左も分からぬ環境に戸惑ったが、開拓村は気のいい人ばかりで、素性の知れない俺にも良くしてくれた。

そして一ヶ月半くらい村でのんびりした生活を送った後、そこで出会った狐獣人の美女であるミーシャと一緒に村を出て、冒険者として活動することになったのだ。

俺はその後のめまぐるしい展開を思い出して、溜息を吐く。

そう、開拓村を出て立ち寄った辺境の町、ロンダでは思いがけず大分目立ってしまっている。

まず、偶然立ち寄った孤児院から錬金術の才能に長けた少女であるジジを鍛えるために雇い、その妹であるウサ耳幼女——ピジも養うことになった。

これはいい。目立つようなことではないし、何より俺の意思で彼女達を迎え入れたからな。

問題はそれ以外だ。

国の中でも指折りの魔術師かつロンダの魔術ギルドのギルドマスターで、英雄とまで呼ばれるドロテアさんに、強く興味を持たれてしまったのが運の尽き。

彼女の研究バカっぷりに振り回された挙句、ロンダの領主の娘であるアーリンの家庭教

師まですることになってしまったのである。

状況に流されすぎてしまったことに今更ながら後悔こうかいしてみるが、もう遅い。

……とはいえ、この状況が最悪かと言えはそうでもない。

これまでは自分とミーシャのデータしか取れなかったため、それ以外の種族・素質がどう成長できるのかを知れるのは願ってもないことだ。

この世界には素質というものがあり、アルファベットで表示される。力の素質が高ければ力持ちになりやすく、魔術の素質が高ければ魔法系のスキルに秀ひびでやすい、といった具合。

またスキルごとにも素質がある。SSSが最大プラス補正ほせい。Cが補正なし。D、E、F、G、Hはマイナス補正で、Hが最大マイナス補正となる。補正が強いほどそのスキルは得やすいのだ。

俺はどの分野も特化させず、バランスを重視じゅうしする設定にしている、すべてのスキル素質がC。だから、素質がCより上の人間は、俺より強くなる可能性を秘めていると言える。

また、種族素質というものもある。

種族素質は高ければ高いほど各能力値の初期値やスキル素質が高くなるのだ。

俺は種族素質もCで、アーリンは俺と同じ人族だけど種族素質がS。

彼女のような素質を持つ人物がこの世界にたくさんいるとなると、俺もうかうかしてい

られないが……現状それほど心配はしていない。

なぜならこの世界の人々はそれほど育成方法に頓着とんちやくしていないから。

俺はまず各数値を育ててからレベルアップさせることで、より効率よく能力の上限を引き上げるような育成方法をとっているが、それをドロテアさんに伝えたところ、大層驚おどろかされた。

どうやらテラスで生きる者達は数値の上がり方を検証けんしょうするというより、ただレベルアップにのみ注力しているらしい。育成においてその差は大きいと思う。

現にアーリンとジジの育成を始めて十日経たったが、満足のいく研修結果が出ている。

アーリンはともかくジジは錬金術と、そして料理の素質が高かったから勢いで雇っただけで、ミーシャほど急いで研修をさせる必要はない。

体力の少ない彼女にはまず、人並み程度の体力をつけてもらおうと考えていたのだが、ジジはたった十日の研修で大人並みの体力や力をつけて、今では必ず料理の手伝いもしてくれる。

しかし、不器用なのは変わらないので怪我けがすることも多い。

今もジジは俺の隣となりで野菜を切ってくれているのだが――

「あつ！ また指を切っちゃいました。えへへ」

どうやらまた手を滑らせたようだ。

って言うか、血がドバドバ出ているじゃん！

「ど、どうしよう。すぐに治療しないと！」

俺が焦りながら言うと、ジジは首を傾げて不思議そうな顔で俺を見る。

くう、メガネっ娘姿も可愛いじゃねえか！

そう、普段ジジは裸眼なのだが、料理や錬金術用に解析効果を付与したメガネを渡してある。今も料理中だからメガネをしており、普段と違った可愛さを感じる。

ジジと一緒に生活するようになって食生活が充実したのか、徐々に顔色や肌艶まで健康的になっていった。それにより可愛らしさや女の子らしさが増して、ふとした拍子に俺はドキッとしてしまう。

「テンマ様は不思議ですね。訓練のときは平気で怪我させるのに、これぐらいで驚くなんて変ですよ。うふふふ」

いや、確かにそうだけど……。

研修の中には物理攻撃耐性スキルを取得させるために、わざと怪我をさせる訓練もある。でもジジは冒険者になるわけではないので、そこまでさせるつもりはない。アーリンも貴族のお嬢様で護衛もいるから、物理攻撃耐性スキルは必要ないと、俺はそもそも考えていたのだ。

それなのに、研修にハマったミーシャが彼女達にもそういったトレーニングをするよう促したことで、結果全員がハードな訓練をする事態になっている。

というのも、人が増えたので俺はD研内に本格的な自宅を早く作るため、その作業に専念して、アーリンやジジの研修についてはある程度ミーシャに任せていたのだ。

一日目は俺がざっくりと研修の説明をしつつ抜き、翌日からは完全にミーシャが主導という流れである。

そして三日目の夜に俺がミーシャに夜間訓練をつけようと訓練場所に行く……そこに怪我をしたアーリンとジジ、そして仁王立ちするミーシャがいた。

彼女は俺を見つけると得意気な表情で、「訓練において怪我させる必要性を自分で説明するのが難しいから、代わりに話してくれ」と言ってきたのである。

いや、必要性を説く前に訓練に入るなよ……なんならアーリンやジジにそんな訓練は必要ないよ、なんて思いながらも、怪我することで物理攻撃耐性スキルが取得できることや、HPの大幅な減少によりHP最大値が増えることを説明した。

アーリンやジジは辛そうにしながらも納得したようで、それから夜間訓練に当たり前に参加するようになったのだ。

ジジは落ち着いた表情で収納から回復ポーションを出し、指にかける。すぐに傷は治ったが、俺は労りの言葉をかける。

「慌てる必要はないから、怪我しないようにゆっくりと野菜を切るんだよ！」

「はい！」

ジジは元氣よく返事をする、たどたどしい手つきで再び野菜を切り始めた。

それを見ながら、俺がジジに野菜の切り方を上手く伝えられていれば……と落ち込む。

とはいえ前世からボッチで、女の子とのコミュニケーションスキルが皆無な自分には酷な話だな、と思ってしまうけれど。

そうそう、ピビからも四日目に参加したいとお願ひされて、今では彼女も研修に加わっている。

正直俺としては、研修は大変だからピビには子供らしく遊んでいてほしいという心持ちだった。

だからやんわりと断ろうとしたんだけど……鑑定してみると、ピビは従魔のシルバーウルフであるシルと毎日のように走り回って遊んでいることで、各種能力値やスキルまで取得していたのである。これは人族ではありえないことだ。

遊びの延長のような形なら良いかと思い、参加させることにした。

……仲間外れにされているように思ってしまったなら可哀想だしね。

それから数日、ピビのステータスの変化を観察しているんだが、ミーシャの研修結果と合わせて考えると、種族によって成長の仕方が違うことが分かった。

まず能力値の『力』のステータスの上昇率は俺、ミーシャ、ピビのような順だ。

つまり狐獣人のミーシャや兎獣人のピビは人族より力がつきにくいのだと分かる。

逆に能力値の『素早さ』の成長の仕方はピビ、ミーシャ、俺と逆の結果になる。

スキルに関しては、ミーシャやピビは気配遮断や気配察知などを早く取得できた。

狐獣人は静かに忍び寄って獲物をしとめるような戦い方が最も適した種族特性で、兎獣人は逃げ足の速さや気配を消すことに長けているので、ヒットアンドアウェイが得意な種族特性だと考えられる。

まだ検証例が少ないので推測にはなるが、種族によって得手不得手に関する程度の傾向が見られると考えて良さそうだ。

そんなこともあって、今は俺としてもピビの研修に関してはちよつと乗り気になってしまっている。

とはいえさすがにポーションを調合して作った専用のドーピング薬を作って渡すのみで、毒薬と麻痺薬は渡してはいないし、直接指導もしていないけど。

「……よし、上手くできたな！」

そこまで考えたタイミングで夕飯が完成したので、俺はジジと料理を食卓に運ぶのだった。

第2話 俺が元凶なの？

翌日、今日も朝から家の建設をしていると、アーリンが近づいてきた。
彼女は年齢的にはミーシャやジジより年下だけど、貴族家のお嬢様でしっかりしているから自然に女子のまとめ役になった。

訓練の手順やお風呂に入る時間まで、アーリンが全員の予定を管理して、シルの食事に
関してもビビに指示を出している。

そのおかげで俺は夜間訓練だけ参加すれば良いので、正直助かっているのだが……。

「テンマ先生、お話があるのですがよろしいでしょうか？」

アーリンがなんとなく怒っているような気がする。

しかし、俺には怒られることをした記憶はない。

「あ、ああ、大丈夫だよ」

つい口ごもりながらもそう答えると、アーリンは真剣な表情で話を始める。

「テンマ先生は素晴らしい能力と知識をお持ちだと、私は思っています」

「あ、ありがとう」

褒められているのに、褒められている感じがしない。

「頭の回転も速く、誰に対しても非常に寛容で優しいです」

「う、うん」

するとアーリンは意を決したように俺に人差し指を突きつけ、言う。

「でも、人としては最低かもしれません！」

えつ、えええー！ どういうことお！?

「失礼なのは承知の上、このままではテンマ先生が周りの人から嫌われてしまうと思ったので、忠告させていたかどうかと決心しました！」

人から嫌われる！ それって前世と一緒にゃん！

俺は窺うように口を開く。

「く、訓練が厳しすぎた、の、かな？」

しかし、アーリンは首を横に振る。

「訓練が厳しいのは当たり前です！ それに厳しい訓練も、テンマ先生は必要性を丁寧に説明してくださいますし、説明の通りの結果が出ているので、誰も不満を持ってなどいません！」



それじゃあ、何が不満なんですかー！

頭を抱える俺を見て溜息を吐き、アーリンは言い放つ。

「問題なのはテンマ先生の性格です！」

それって、研修が厳しいとかよりよっぽど最悪じゃん！

愕然とする俺に、アーリンは続ける。

「テンマ先生は色々な人に優しくしていますが、まずそれが大問題です！」

それは良いことじゃないの？

疑問に思ってアーリンのを見ると、彼女は再度溜息を吐く。

「はあ……テンマ先生は分かっているように俺をしっかりと見て口を開く。」

アーリンはそう言うのと、気合を入れるように俺をしっかりと見て口を開く。

「私は何度か冒険者ギルドに行く際に一緒にさせていただきましたが、行く度にお土産としてクッキーやジャッキーをギルド職員に渡していますよね？」

「は、はい」

俺はいつの間にか正座しながらアーリンの話を聞いていた。

「ギルド職員の人がジャッキーをお土産に渡されると、残念そうな反応をしているのに気付いていますか？」

それには気付いているので頷く。

「そうなのですね。でも、無償でロンダの町でも人気のジャーキーをもらっておいで、残念そうにするギルド職員になぜ怒らないのですか？ いえ、別に怒らなくてもいいです。そんな失礼な反応をされているのに、お土産をなぜ今も渡しているのですか？」

「甘味の方が貴重だから、ジャーキーがそれより喜ばれないのは仕方ないかなって……それにジャーキーは人気があるけど、俺はすぐに作れるから大した物じゃない……」

そう答えると、アーリンは目を吊り上げて反論してきた。

「だからテンマ先生は人に嫌われることになるんです！ テンマ先生は相手のことを考えているようで、まったく理解していません！ 無償で物をもらい続ければ、相手にとつてそれが普通になってしまいます。すると相手の要求はどんどん過剰になり、テンマ先生がそれに応えられなくなつてやめてしまうと、今度はそんなテンマ先生に相手は腹を立て、文句を言い、離れていくんです！」

言われてみれば、思い当たることがありすぎる。

あれっ、これ前世でも同じことをしていたような気がするぞ……!?

アーリンは更に言葉を重ねる。

「ミーシャさんと一緒に行動することになった経緯も聞きましたが、それを聞いたとき私はミーシャさんを嫌いになりそうでした。村や家族ぐるみでテンマ先生を利用しようとしているのが明白じゃないですか！ 深く考えもせずそれに乗ったミーシャさんは最低だと

思いました。でも、そうさせたのはテンマ先生が中途半端に優しいからです！ ハッキリと断ればミーシャさんも諦めたし、彼女の家族もそこまでしなかったんじゃないですか？」

アーリンがそう思っていそうだなということには気付いていたけど……。

「確かにその通りだが、ミーシャとはきちんと話し合ったから問題ないはずだよ」

俺の言葉に、アーリンは頷いた。

「それを聞いたから、ミーシャさんを嫌いにならずに済みました。今のミーシャさんには甘えはないし、テンマ先生にお世話になった分をいつかお返ししたいって言っているのを聞いたから、今では仲良しです」

そ、そうなんだ……。

胸を撫で下ろす俺に、アーリンは次なる疑問を投げかけてくる。

「ジジちゃんのことはどうお考えですか？ 彼女は本当に一途で頑張り屋です。でもジジちゃんは不器用。そんな彼女をあえて料理をさせるために雇ったと言われても釈然としません。家族なんて言いながら、同情して雇っただけじゃないでしょうか？ それとも本当にエッチなことを考えているのですか？」

俺は少し考える。

アーリンが言っていることは間違っているのだが、どう説明したものか……。

あまり自分のチートさを人に知られたくはないけれど、これはたぶん正直に言わないと

納得してもらえないよな。

考えをまとめてから俺は口を開く。

「それについては誤解だよ。ジジには本当に料理をしてもらおうと考えていたし、他にも家事を任せるつもりだよ。それに錬金術も覚えてもらおうと思っっているんだ」

「で、でも、ジジちゃん是不器用だから……」

「その通り、ジジは他の人より少し不器用だね。そして体力も力もないから、練習の時間だってそう長くは取れない。でも、体力と力は研修で鍛えればなんとかなるし、頑張り屋のジジなら不器用さも努力でカバーできると俺は信じているんだ」

「でも、それならもっと良い人が——」

尚も食い下がるアーリンの言葉を制して、俺は言う。

「ごめんね、人には言ったことがないけど、俺には人の素質が分かるんだ。だからジジの料理と錬金術の素質がすごいんだって確信できる」

「……本当ですか？」

アーリンは訝しげな視線を向けてくるが、俺は胸を張る。

「ああ、本当だよ。そしてアーリンの魔術師としての素質や適性もすごいと思っている。そうじゃなければ、領主の娘と関わるなんていうリスクの高い案件、依頼でも断っていただろうなあ」

アーリンは元々大きな目を更に大きく開いて驚いている。

「私はてっきり、お父様や大伯母様に頼まれて仕方なく私のことを……」

そうか、と俺は思い至る。

こうして色々聞いてきたのは、自分がもしかしたら俺の邪魔になっってしまったんじゃないかという不安もあったんだろう。

ミーシャよりも、ジジよりも、領主の娘である自分を引き受けることのリスクが高いことは彼女自身が一番知っているのだ。

俺は努めて優しい口調で言う。

「アーリンがさっき話してくれた、俺の性格や中途半端な優しさが良くないことは、自分でも思い当たる節があるし、反省したよ。言い辛いことをハッキリと言ってくれてありがとう。確かに俺は流されるような形で、ミーシャやアーリンを訓練することにした。でも稽古をつけようと思った一番大きな理由は優しさじゃなく、ドロテアさんと同じ探求心だよ。俺とは違う素質を持った二人が、どんな成長をするのか検証したかったんだ。俺の個人的な欲求で二人を利用しようと思った。結果的に二人のためにもなると自分に言い訳しているけれど、罪悪感はある。だから食事や装備を提供してるんだ。そんな俺をアーリンは軽蔑するかい？」

アーリンは少し動揺した表情を浮かべたが、しっかりと俺の目を見て答えてくれた。

「ちょっとテンマ先生のことを誤解していたようです。なぜ大伯母様に対してだけ、少し厳しいのか分かった気がします。要するに大伯母様と同類——研究のことになると他のことを考えない研究馬鹿なんですね?」

ええーと、そこまで酷くないと思うけど……。

俺は予想外なところからのダメージに、よろめきそうになりながらも反論する。

「た、確かにそうとも言えるけど、ドロテアさんほど暴走はしていないつもりなんだけど……」

すると、それにはアーリンも頷いた。

「そうですね。確かに大伯母様は、他人の迷惑を考えないところがありますね。まだテンマ先生は相手のことを考えているのかもしれませんが……」

ほうと溜息を吐く仕草を見ながら俺は思う。この子は本当に十二歳なのだろうか、と。

そんな俺の内心など知らず、アーリンは思考を整理し終えたのだろう、晴れやかな表情で手をパンと打ち鳴らす。

「分かりました! 正直、人の好いテンマ先生に、無理やり両親や大伯母様が頼んだから、私の訓練をしてくれていて、申し訳ないと思っていたんです。でも、テンマ先生が検証をする意味もあるのだと知って、心が軽くなりました」

……切り替えの早い子のようにだ。

俺はおずおずと言う。

「そ、そうだね。あと周りに嫌われそうなことをしてしまっていたら、お、教えてくれると助かるかな」

「了解です! ではこれから交渉事などは事前に相談してください。先日のカロン商会との契約みたいな調整もできますし、父との研修の依頼料の交渉もお任せください。今回の依頼料は研修の経費や成果から考えると安すぎます」

この間、知識などの権利を登録できる『知識の部屋』でこの世界にはない燻製の方法をカロン商会名義で記録するようお願いした。その際、金が欲しいわけでもなかったので無償で情報を渡そうとしたのだが、一緒にいたアーリンが途中から仕切ってくれたのだ。

その結果、表面的にはカロン商会の権利としながらも、実質俺の権利として登録できた。研修の依頼料にしたって、俺としてはどちらでも良いのだが、先ほどアーリンに言われた通り施しすぎてしまう結果になると後が怖い。お願いすることしよう。

「よ、よろしく願います」

「無償で人に物を渡すときは、必ず私の許可を取ってくださいね!」

「わ、分かりました……」

対外的なことはアーリンが仕切ってくれることになり、頼りになるなと思いつつも彼女が少し怖くなる俺だった。

第3話 どこでも自宅完成！

アーリンから説教をされた日から更に十日経過した。

あれから冒険者ギルドに二度ほど納品に行ったが、お土産を渡すことはしなかった。

二度目にお土産を渡さず帰ろうとすると、受付嬢のルカさんがそれとなくお土産を催促してきたが、後ろに控えるアーリンが視線を送ってきたので、俺はハッキリと返事した。

「ハニービーの蜂蜜は簡単に手に入る物ではありませんし、ジャーキーはカロン商会で商品化の準備を始めているのでお土産としてはもう渡せません！ 一通り挨拶も済んだと思いますので、我々だけ毎回お土産を渡していたら、賄賂みたいで他の冒険者に変に思われてしまいそうで困るので……」

そんな感じで後半はもによしてしまっただが、俺としては頑張ったほうだと思う。

また、この十日間の間にカロン商会は無事に小型の燻製施設を完成させた。しかし試作品を食べたが、自分の作ったジャーキーと食べ比べると美味しくない。

とはいえ味付けが塩だけの調味液で作ったにしては、食べられる物にはなっていた。

カロンさんも既存の干し肉より商品として魅力的だと自信を持っているようだ。

ついでにフォレストボアのバーコンやホーンラビットの腸詰を教えると、それにも挑戦したいと気合たっぷり答えてくれた。

最後にカロンさんから、俺の作った商品を広めないようにお願いされて、アーリンからもう人に配ってはいけないと釘を刺されてしまったのである。

それくらい俺でも心得ていたよ……たぶん。

アーリンはこの間言っていた通り彼女の父親と交渉して、訓練依頼を一度完了扱いにして、改めて依頼を受け直す形で着地させた、とのこと。

一ヶ月で金貨三十枚での契約だったところを、金貨三百枚にしようと交渉していたが、辺境の准男爵家ではさすがに払えないので、一ヶ月金貨百枚に決まった。アーリンは納得していないようだ。

自分の家だというのにシビアだな、なんて考えてしまう俺である。

そういった外交的なところをアーリンが担ってくれたために、俺は負担が減り、家の建設に集中できる……と思っていた。しかし研修が進むごとにポジションを使う量が多くなる上に、ピビが研修に参加するようになったこともあって、研修用のポジションを作るための素材が足りなくなってしまった。だから半日は素材採取に時間を取られてしまっ

いる。

それでもコツコツと建設を進めてつい昨日、やっと家が完成した。
内装を整えていない部屋もあるが、お披露目できる状態になったので、今日は午後から披露会をするつもりだ。



訓練の後、みんなが家のテラスに集まってくる。

辛そうにテラスが上がってきたみんなを代表して、アーリンが口を開く。

「テンマ先生、朝からの訓練でポーシオンを飲みすぎて誰も昼食を食べられる状態ではありません。先にお風呂に入らせてもらえませんか？」

あ、ポーシオンの飲みすぎを考慮していなかった。

そういえば最近は昼食を一人で食べていたし、他のみんなが昼食をどうしているのか把握していないからすっかり忘れていた。

それなら先に新居のお風呂に入らせてあげよう。

「じゃあ、新しい家——どこでも自宅のお披露目を兼ねて、先にお風呂に案内するよ。ついてきて——」

俺は先頭に立ち、どこでも自宅の玄関に向かう。

家の名前はD研内にある自宅だからどこでも自宅、というシンプルな成り立ちだ。どこでも自宅は滝の上部に架かる橋の上に立っている。

玄関の前に到着すると、みんなが驚いてくれるのを期待して振り返る。

そこには先ほどより辛そうにしているみんなの顔があった。

鑑定すると状態異常の表示はないので、単に訓練の疲れが出ているのだろう。

玄関の魔道具で個人を認証して、不審者が入らないようにしていると説明したところで誰も聞いてくれそうにないので、説明は後にする。

綺麗に装飾された大きな扉は、触れただけで左右に開いた。

これは前世の自動扉を参考にして作り上げた魔道具で、シルでも出入りできるように、スライドして開閉する扉だ。

みんなは辛そうにしながらも驚いている。

中に入ると、二階まで吹き抜けになっている広いホールがある。

正面にはリビングに向かう扉、左には二階に続く大きな階段が見えた。

お風呂は二階にあるので、階段を上る。

そして右に進むと、廊下がある。

右手にはいくつかの部屋の扉、左手には暖簾のある入口が二つ並ぶ。

俺は暖簾を指し示して言う。

「ここが新しい風呂だ。左が男性用、右が女性用だ。みんなはそちらから入ってくれ。どちらかの脱衣所に人が入ると、入った人が出てくるまでもう片方には入れないようにしている。浴場は男女共用だから、中で鉢合わせるのを防げるんだ」

これを搭載するか、作っているときに非常に悩んだ。ラッキースケベが発生しなくなってしまうからな。

ただ、間違つて領主の娘であるアーリンを相手にラッキースケベが発生してしまえば、厄介なことになりかねないと考え、そのリスクを排するのを優先した形だ。

「脱衣所がロックされる仕掛けを起動する前に少しの間だけ『女』のほうに入るけど、説明が終わったら俺はいなくなるから、ゆつくりとお風呂に入ってくれ」

俺はそう話すと「女」の暖簾を潜る。

まず脱衣所には五人座れる化粧台が作っており、大きな鏡がある。ドライヤーの魔道具も置いた。

できれば訓練のためにも、自分で生活魔術の一種であるブローを使って髪を乾かしてほしいが、まだ全員上手く温風が出せないので仕方ない。

右手にはロツカーが並んでいるものの、それは飾りというか、雰囲気を出すためだ。今いるメンバーは全員魔道具に服を収納できるので必要ないからな。

それだけではない。

日本の銭湯のように所々にテールセットや長椅子や、ドリンク専用の冷蔵庫も置いている。中には前世の牛乳瓶を模した瓶に入れたブルーカウの牛乳やフルーツ牛乳、様々な果物のジュースが入っている。

それらを一通り説明すると、俺は「そちらの扉から浴場に入れるから楽しんでくれ！」と言いつ残して、脱衣所を出ようとする。

しかし、後ろから服の裾を引っ張られた。

「テンマも一緒に入る。水着を着れば問題ない」

ミーシャさん、最近のあなたは素晴らしい！

「そ、そうか。確かに浴場の説明をしないと危ないかもなあ」

俺はそう口にしつつ、みんなの様子を窺う。

ピピは嬉しそうに俺を見ていて、ジジは少し恥ずかしそうにしている。アーリンは気にした素振りもない。

俺は仕方ないなあと言いつながら、外に出て着替える。

そして女子の着替えを待って、浴場へ。

正面は一面ガラス張りになっており、川の上流側が一望できる。プールのような大きな湯船には、小さな滑り台が取り付けてある。また、その他にも様々なお風呂があるのだ。

シルが速攻で大きな湯船に飛び込むと、ピピがそれを追うようにひらひらとした飾りの付いた水着で走ってきた。

「お兄ちゃん、ここのお風呂すごい！シルと遊んでも大丈夫？」

「ああ、でも気を付けるんだよ」

ピピはすぐにシルのほうに向かっていく。

他のみんなは全員ワンピーススタイルの水着を着用している。

一応ビキニタイプも渡していたのだが、この世界では受け入れられないのだろうか？

ジジは恥ずかしそうに俺を見ている。

おうふ、ジジはワンピースでもすごい！

訓練で少し筋肉が付いてきたようだ。

かつては胸は大きかったが、あまりいい物を食べられていなかったせいか、それ以外はどこか貧弱な感じでアンバランスなスタイルだった。

しかし今はいくらかバランスの取れたスタイルになり、破壊力が倍増している。

そしてアーリンは……年齢相応、って感じだな。

「まずはポジションを抜きたいよな？」

そう聞くとジジ、アーリン、ミーシャが頷いたのでスチームサウナに案内する。

「これはスチームサウナだ。蒸し風呂と言ったほうが分かるかな？」

するとアーリンが嬉しそうに答える。

「蒸し風呂は王宮にあると聞いただけで見たことがありませんでした。それがこれですか!？」

確かにこの世界の文明の水準を考えると、サウナが一般に普及しているとは思えない。

むしろ王宮にあるだけすごいかもしれない。

俺は頷いてから答える。

「そうだ。汗が大量に出るから、ここでポジションの水分をしっかり抜くことができる」それを聞いた三人は喜んでは中に入っていく。

俺は彼女達を見送ってからシルとピピのもとへ。

滑り台で遊んだりプカプカ浮いたりしながら風呂を堪能した。

五分ほどするとサウナに入っていた三人が出てきて、汗を流してから湯船に浸かる。

それからしばらくのんびりした時間を過ごし、俺はシルとピピとともに一足先に風呂を出た。

シルをモフモフになるまでブラッシングしてから、廊下でみんなが出てくるのを待つ。

風呂上がりのシルモフは至高の時間だなー！

ピピと一緒にシルモフしていたのだが、しばらくしても他の三人は出てこない。

女の子は何かと時間がかかるから仕方ないか。

それから一時間以上経った頃、三人は出てきた。
「テンマ様、お待たせしてすみません」

ジジは本当に申し訳なさそうに謝ってきたが、アーリンとミーシャは気にしていないようだ。

「それより部屋に案内するよ」

そう言って、階段から一番近い部屋の前に行く。

「ここはジジとピピの部屋だよ。他の人は承諾がないと入れない。ジジ、扉に魔力を流せば開くから、試してみてくれないか」

ジジに部屋を開けてもらう。

部屋にはソファや勉強用の机があり、奥には滝側の景色が一望できる大きな窓がある。

「その扉の中が寝室になっていて、収納と化粧台もあるよ」

ミーシャもアーリンもジジ達と部屋の中を確認している。ジジが一通り部屋を見て回ると、焦ったように戻ってくる。

「テンマ様、私達にこの部屋は贅沢すぎますー」

「気にしなくても良いよ。これからジジには頑張ってもらうから、部屋ではゆっくりしてほしいんだよ」

それでも申し訳なさそうにするジジは本当に良い子だ。

その後、ミーシャとアーリンも部屋に案内する。

こちらは一人用の部屋だからジジ達の部屋より少し狭いが、基本的には同じような作りになっている。

「一人で寝るのは寂しい」

ミーシャが突然そんなことを言い出した。

これまでは四人一緒に部屋で寝てたしなあ。

「一番奥に広い部屋があるから使っても良いよ」

俺はそう言って廊下の突き当たりの部屋に案内する。

部屋の中の階段を上がると寝室があるのだが、そこにはキングサイズ二つ分くらいの大きなベッドが置いてある。

「この部屋は自由に使って構わない。一人になりたいときは自分の部屋で寝てもいいし、みんなで話しながら寝たいってことならこの部屋で一緒に寝ればいい」

ピピはベッドで飛び跳ねて遊んでいる。

ミーシャ達も布団の感触を確かめて、ご満悦のようだ。

それから俺らは部屋を出て一階へ下り、今度は玄関の向かいにある扉を開ける。広いリビングにはソファやテーブルがいくつも置いてある。

また、滝側に大きな窓があり、横にある扉からテラスに出られるのだ。

そしてリビングを挟んで反対側には二十人ぐらいが一緒に食事をとれるダイニングや、大きなキッチンがあり、入口から一番遠い扉の奥は各種工房へと繋がる廊下になっている。みんなは最初こそ驚いていたが、途中から何か諦めたような、呆れたような顔をしていた。

俺はどこでも自宅の説明をこう結ぶ。

「俺が作ろうと思っていた設備はほとんど作り終えたし、明日から俺も加わって本格的な訓練を始めよう！」

なぜか全員が目を見開いて驚いている。

まだ基礎訓練しかしていないんだけど、みんなの認識は違っていたってことかな？

すると、固まっていたアーリンが、慌てたように相談してくる。

「テ、テンマ先生、ほ、本格的な訓練をする前に、お願いがあるのですが？」

「んっ、何？」

「じ、実は四日後が私と大伯母様の誕生日なんです。貴族にとって十三歳の誕生日は特別で、大伯母様も六十歳という節目を迎えるので家で盛大に祝う予定なんです」

ああ、貴族だとそういうのがあるのか。

ドロテアさんには赤いちゃんちゃんこでもプレゼントしてあげようかな！

アーリンは続ける。

「それにジジも三日後に成人を迎えますし、ミーシャさんの誕生日も五日後です。できれば一緒にお祝いできないかな、と」

そうか、意外にみんなの誕生日って近いんだよな。それはしっかり祝ってあげないと！

「良い考えだね。主役なのに申し訳ないんだけど、日程とかはアーリンが調整してくれるかい？ 家の都合とかもあるだろうし。本格的な訓練はその後で構わないよ」

そう言くと、アーリンは嬉しそうに頷く。

「ありがとうございます。それでは費用は出しますので、食材の用意をお願いしてもいいですか……？」

無料で良いと言うと怒られそうだな……。

「必要な食材の種類や量、金額もアーリンのほうで調整してくれたら調達するよ。ジジとミーシャの誕生日も兼ねているし、金額に関しては負担にならない範囲でアーリンが決めると助かるな」

アーリンの表情を見ると、微笑んでいるので正解だったようだ。

「分かりました。お任せください」

こうしてどこでも自宅の紹介は終わった。

そしてその後、昼食兼夕食としてホロホロ鳥のフルコースを新しいテラスで食べたのだった。

第4話 エルビス商会の大失態^{だいしつたい}

どこでも自宅のお披露目をした翌日。

俺らはアーリンの提案で、誕生日の準備をするためにロンダの町に行くことになった。

ミーシャとアーリンは冒険者ギルドの納品の際に来ていたが、ジジ達は俺に引き取られてから、初めて町に戻ることになる。

町に移動するのは午後からなので、俺は朝から食材を確保しに行っていた。

まずハニービーの巣に向かい、蜂蜜を採取する。

かれこれ蜂蜜の採取は三度目だ。

甘味は定期的に摂取^{せつしゆ}したくなるし、それに冒険者ギルドにクッキーを差し入れていたからな。

……アーリンの怒り顔が過つたので、頭を横に振り、掻き消した。

そういえば、前回来たときにレッドベアが巣を襲^をつていたことを思い出す。

あのときは俺の蜂蜜を奪^{うば}わせるものか！ と衝動的^{しょうどうしやう}に周辺のベア系魔物を殲滅^{せんめつ}してしまい、後で自分のお茶目？ な行動に少し反省したのである。

今回はそんなこともなく、さくつと蜂蜜を回収して森の中にある草原へ向かう。

そこにはブルーカウが群^むれを作っている。

ブルーカウからは牛乳が採^とれるのだ。

俺は最初に群れを発見したときのことを思い出す。

嬉しさのあまりスタンで群れごと気絶^{きぜつ}させた俺は、倒れているとミルクを上手く採取できないことに気付き、土魔法で拘束^{こうそう}してしほるようにした。

しかし、群れのブルーカウからミルク採取していると、群れのリーダーは仲間を助けようと暴^{あは}れてしまう。首や足から血が流れるのを見てるとさすがに可哀想で、回復魔法を使って怪我を回復しつつ作業を行うようになった。

だが三日に一度ミルクを採りに行く度に同じことを繰り返すので、いっそ討伐^{とうばつ}して食材として食べてしまうのも一案かと思ひ直す。

肉の付き方を確認するべくブルーカウリーダーの全身を触^{さわ}る。

ステーキも良いがやはりローストビーフのほうが良いかな……牛タンも美味しいだろうし、タンシチューも良いかも……と考えて正面に回り込んで舌を確認しようとする。

立ち読みサンプル
はここまで

研修時代は牛系の料理にハマって毎食牛料理を堪能していた時期があるくらいには牛肉が好きな俺だが、この世界に来てから牛系の魔物は食べていない。

だから、頭の中は牛タンで一杯だった。

しかし、ふと異変に気付く。

ブルーカウリーダーはなぜか暴れるのをやめて怯えたような目をしているのだ。どこかで見た覚えがあると思った瞬間に、ブルーカウリーダーと繋がった感覚があった。またやってもうたー！ シルを従魔にしたときの感覚と同じじゃん！

なんて思うがもう遅い。

ブルーカウリーダーの鑑定をすると称号の欄に『テンマの従魔』が追加されていた。

俺は投げやり気味にブルと命名する他ない。

ただ、それ以降は拘束せずともブルが他のブルーカウに命令し、順番にミルクを採取させてくれたので、結果オーライではあるのか……？

そんなことを思い出しながら草原に到着すると、ブルがこちらに走ってくる。

ワンボックスカー並みの巨軀なので、地面が少し揺れている。

群れのブルーカウも後ろから付いてきている。

俺は群れを手の動きで制してから、言う。

「今日からお前達も一緒に暮らすぞ」

D研から出るときは最後にいた場所にしか出られないが、入る場合はどこでも扉を開ける。

俺はD研の扉を開いて、順番に中に入れていく。

シルが中で待っていて、ブルーカウ達を川の上流の草原に案内する手筈になっているのだ。

すでにブルとシルの顔合わせは済んでいる。

最初、シルが涎を垂らしてブルーカウの群れを見ていたので心配していたが、ブルが俺の従魔だと分かってからは、残念そうにしながらも仲良くしてくれている。

さて、移動しながらホロホロ鳥やフォレストボアも獲っていたおかげで、食材の準備は大体終わったから、いったんD研に戻るとするか。

ちなみにロンダの市場に初めて行ったときに購入したワイルドココの有精卵は魔力を与えてやると無事に孵化した。

しかし卵が産めるようになるまで最低でも半年かかるらしいので、D研内の森の中で放し飼いにしている。

普通は成長する前に森に放すと、他の魔物に捕食されるのでやめるように言われたが、他の魔物がないD研内であれば問題ないはずだ。